

Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **56**, 1-8 (2008)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

表現遊びの作品作成過程における学びの要因 —保育者を目指す大学生の集団活動を通して—

遠 藤 晶
(武庫川女子大学文学部教育学科)

The Cognitive Framework of The Creative Processes of Expression Play (*hyogen-asobi*) — Through the Subjects for Expression Classes at a Child-care Worker Training Course —

Aki Endo

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

The purpose of this research was to examine the cognitive framework of the creative processes of expression play (*hyogen-asobi*). The subjects of this study were 100 students of expression classes held at a child-care worker training course. In the process of creating works of expression play, five factors were selected consisting of degree of completion, creativity, strain, resistance, and enjoyment.

The research revealed that in the creative processes of expression play, students felt both positive and negative factors. The students became aware of the importance of cooperation in regards to their own body expressions and the value of expression play for children.

1. はじめに

今回の学校教育法の改訂に伴い、幼稚園の教育の目標について、第3章第23条「5. 音楽, 身体による表現, 造形等に親しむことを通じて, 豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと」と, 旧学校教育法第7章第78条で示されていた「遊戯」にあたる部分が「身体による表現」に変更された。「遊戯」から「身体による表現」への変更は, 幼児期の表現能力の育成の重要性が基本法規に反映されていると解釈できる。

筆者はこれまで幼稚園教諭, 保育士資格の取得を目指す学生を対象に, 「保育内容 表現 I」で身体表現に関わる授業を担当してきた。「保育内容 表現 I」は教職に関する科目として設定され, 幼稚園教諭免許状を取得するために必修科目と位置づけられた科目である。「保育内容 表現 I」の授業においても, 身体表現の重要性をさらに確認した上で, 授業実践に結び付けたいと考えている。

これまでの授業では, 身体表現の意義を自ら学び取ることを目標として演習課題を設定してきた。演習課題は, グループで表現遊びの作品を作成し発表することである。幼児教育に携わろうとする学生にとって, 幼児の特性に応じた身体表現の指導方法の確立を見据えた課題設定であるのかを確認したいと考えた。

本研究では, グループで表現遊びの作品を作成する演習を通して受講者がどのような体験をし, どのような学びをしているのかを知るために, 「保育内容 表現 I」の大学生を対象に, アンケート調査を行った。さらに, 提出された演習課題に対するレポートの自由記述をもとに表現遊びの作品作成過程における学びの要因を考察する。

2. 幼児の身体表現について

(1) 教育の変遷

幼児教育の歴史の中をみると、明治初期に伊沢修二が「唱歌遊戯」、つまり「歌を歌う活動」と「おゆうぎ」が一体となった活動を重視し実践を進めて以来、保育のなかに音楽と身体表現を結びつけた内容が位置づけられてきた(大畑 1991)。平成元年に、音楽・絵画制作・身体表現を総括した領域として、「自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすること」を目的として領域「表現」が設定された。その間、大正から昭和前期にかけては、土川五郎や戸倉ハルが紹介した遊戯作品集が、幼児の身体表現の教材として用いられてきた。また、ダルクロワーズのリズム教育やオルフシュールベルクなど諸外国のリズム教育の影響を受けながら引き継がれている。しかし、平成元年の幼稚園教育要領改訂の際、教育の方法については、音楽やダンスの専門的な教育に偏りすぎない、自己の表現や自由な表現を重視した幼児の主体性を大切にすることが確認された。

(2) 幼児の身体表現の特性

幼児の身体表現は、表出的な表現や、手遊び、リズム遊び、リズムダンス、お話をもとにした劇遊びや、言葉のリズムを楽しむ歌遊び、リズムや音楽にあわせて身体の動きを楽しむ表現遊び、さらに展開した形態として、ミュージカルなど芸術的な表現につながる経験をさせている。

名須川(2005)は内的衝動として湧き上がってきたものを、「音と動き」「リズムミカルな言葉と動き」「歌と絵」などの表現媒体が複合した形で現れることを観察している。幼児の身体表現は、「一人では長い時間続かず瞬間に消えていくその場限りの表現」(古市 2007)という特性があり、さらに、園の生活の中で体験する運動会や生活発表会などにむけて身体表現を積み上げていく経験など、集団だからこそ体験できる要素も忘れてはならない。身体で表現する体験を積み重ね、人の前で発表することは、幼児の成長につながると保育者は捉えている(遠藤・花木 2007)。集団で身体表現をする体験は、一斉指導にもつながると捉えられるが、仲間と一緒にすることで生まれる感覚もある。森(1999)は「だれがだれをまねるといっているのではなく、子ども同士が顔を合わせ、手をだしたりしながら言葉でなく「からだ」で合図をおくりあっている」様子を「共振」と呼んでいる。「共振」は、状況を共有する仲間同士にうまれる現象であり、集団だからこそその体験である。

言葉やイメージを身体の動きで表現する際には触れ合い、手をつなぐなどのふれあいや、身体接触が必要である。傳田(2007)は、「人と人とが触れ合うことは、第三の脳といわれる皮膚感覚を刺激し、脳の活性化にもつながる」というが、幼児期にこそ、触れ合う体験によって脳の活性を促したい。中島(2003)は、「ひと昔前にはごくあたりまえと思われていた「遊びのルール」というか「コミュニケーションのルール」といったことに、大きな欠落をもった子どもたちが増えつつあることにおどろかされる。子どもと呼ばれている年齢のうちに直接的に身体が触れ合う体験が必要である」と述べているように、身体を通して仲間と通じ合い、時間をかけて身体に刻み込んでいく身体による表現体験の重要性を再度確認しなければならない。

(3) 幼児の身体表現の指導者の資質

幼児の保育に携わる保育者が幼児の身体表現は必要だと感じながら、指導は難しいと捉えている(遠藤 2006)。難しさの背景には、動きの伝え方について、幼児の主体性を大事にする保育の方法と「動きを教える」という方法の狭間で保育者が戸惑いを感じているからである。

動きの伝え方には2通りが考えられる。松岡(1995)は、民族芸能の伝承における動きの伝え方から示している。ひとつは、「とにかく一通りの舞を見た後、その動きに合わせて動いてみることを2、3回繰り返す、さあやってみろという教え方」と、もうひとつは「ひとつの舞を細かく部分に分け、その部分ごとに説明と見本が示され、習得者はそれをなぞっていく方法」である。そのどちらの伝え方をしても幼児にとっては難しいことであり、幼児の特性に応じた表現の方法と、指導の方法を工夫することが必要になる。その点が、保育者にとっての難しさであろう。「幼児の表現指導には人的環境が重要」(名須川, 2004)であるが、保育者が多様な表現方法を駆使できることが問われるところである。

3. 表現遊びの作品作成課題

(1) 「保育内容 表現 I」の科目内容

筆者が担当している「保育内容 表現 I」の科目目標を「保育者には、子どもの表現を共有する心と身体を持ち合わせていることが求められる。本講義では、身体表現を通して表現する楽しさや人とかかわる楽しさを体験し、保育者として子どもに向き合う姿勢を学んでいく。」と設定し、「歌、音楽、身体の動きなど、様々な表現の手段を用いて、幼児の身体表現の方法や内容を理解し、指導の方法を考える。身体表現の作品を作り上げる過程では、作品の構成や表現方法を考え、表現を高める音楽について工夫がある。グループの中で自分の思いや考えを伝えながら、各自が十分に表現しコミュニケーションできることをめざしていく。」という授業内容をシラバスで示している。

15回の授業の内容は Table 1 に示した。前半は幼児の表現の媒体となるものを紹介し、演習形式で授業を行い、表現遊びの作品作成の説明から発表まで6回分の授業をあて、13回目の授業で発表を行った。14回目の授業は発表作品をビデオに撮影し、再生しながら評価反省を行った。

Table 1. 「保育内容 表現 I」の授業計画

回目	内 容
1	授業について
2	保育内容「表現」について
3	わらべうた・遊び歌
4	リズム遊び
5	フォークダンス・リズムダンス
6	表現あそび
7	手遊びの指導(グループごと)
8	創作作品について
9	作品の構成を考える
10	音楽の効果を考える
11	動きを考える
12	リハーサル
13	作品発表
14	作品の評価と反省
15	まとめ

(2) 表現遊びの作品作成の授業の概要

表現遊びの作品作成にあてた授業の流れを示す。

①表現遊びの作品作成の説明(8回目)

8回目の授業で、幼児の生活発表会の表現の事例と、作品過年度の学生が発表した表現あそびの作品をビデオで鑑賞し、作品の多様な展開例を紹介した。次に、表現遊びの作品作成に関わる下記の説明を行った。

- ・グループ(10人程度)で作成する。
- ・作品時間は長くて10分程度
- ・せりふは極力使わず身体で表現する方法を考える。必要に応じて、言葉、ナレーション、音楽の使い方を工夫すること。
- ・楽曲は各自で選曲し、効果的に音楽を用いる。使用した楽曲のCD番号は控え、レポートの際には明記すること。
- ・発表を助ける道具・衣装があれば考えること。
- ・何度もリハーサルをして、発表に備えること。

以上の内容を事前に説明するが、作品作成の途中で起きる質問や相談には個別に応じながら指導を行った。

②表現遊びの作品作成演習の流れ

- ・10人程度のグループを構成する(8回目)
- ・表現遊びの作品のテーマを決定する(9回目)
- ・テーマに沿った身体表現の方法や動きに合う音楽を考える。身体表現の方法については、ダンス的な表現、自由表現など構成に応じた表現方法を検討する(9回目～12回目)
- ・表現遊びの作品の発表リハーサルを行い、発表を支える補助的な役割分担を理解する(12回目)
- ・表現遊びの作品発表。作品発表の様子を補助グループがビデオ撮影を行う(13回目)
- ・発表作品のビデオを鑑賞し、自己評価、反省を行う(14回目)

4. 調査

(1) 調査の方法と内容

平成20年度前期大学2年生に開講されている「保育内容 表現 I」の受講生のうち、筆者が担当して

いる3クラス109名に対して、アンケート調査を行った。各クラスの授業の最終日(7月中旬)に、対象学生にアンケートの主旨、内容を説明した上でアンケートを実施した。

アンケート項目については、過去の「保育内容 表現Ⅰ」の授業で提出された受講者の感想に記述された内容を参考に、表現遊びの作品を通して感じた内容40項目からなる調査票を作成した。各項目については「6. とてもよくあてはまる～1. まったくあてはまらない」の6件法にて調査をした。

(2) 集計の方法

回収された回答数は107名であったが、完全回答された100名を分析の対象とした。分析には統計処理ソフトSPSS14.0を使用した。

5. 結果と考察

(1) 表現遊びの作品作成過程の学びの要因

大学生が表現遊びの作品作成を通して感じたことについての調査項目40項目の平均、標準偏差を求め、天井効果が見られた項目を除く20項目について主因子法・Promax回転による因子分析を行った。5因子を仮定して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った(Table 2)。5因子で20項目の全分散を示す説明率は56.61%であった。

得られた因子は学生にとって表現遊びの作品作成を通しての学びの要因である。以下の因子を学びの要因として解釈していきたい。

第1因子は、6項目からなるもので、「動きをしっかりと覚えること」「リズムに合わせることができること」「できていない人には、教えてあげたくなる」「音楽を見つけるセンス」「動きでうまく表現すること」「自分の思うことをどんどん伝えること」など身体で表現する内容をできるだけうまく伝えようとする完成度の高さをもとめた内容であるので「完成度」因子と命名した。

第2因子は、「作りたい作品の構成を考えること」「音楽をききながら動きを思いついていくこと」「ストーリーを考えること」「意見をまとめること」「動きのイメージと音楽の結びつきを感じること」「動きにするために、関連する言葉や事柄をイメージすること」「音楽の歌詞を取り入れた動きにすること」など、表現遊びの作品に作り上げるまでのプロセスでの思考やイメージすることなどを含んでおり「創造性」因子と命名した。

第3因子は、「自分に負担がかかりすぎていたのでいやだ」「時間が限られているのに、うまく時間を使えない人がいるのはいやだ」「ダンスの専門的技術」などから、作品を仕上げる過程でうまく進まないときの負担感が表れており、「負担感」因子と命名した。

第4因子は、「発表することは緊張するので、できたらしたくない」「身体で表現することは難しい」人の前で表現することに対する「抵抗感」因子と命名した。

第5因子は、身体で表現することの楽しさを改めて感じ取ったという内容であり、「楽しさ」因子と命名した。

(2) 下位尺度間の関連

表現遊びの作品作成過程の学びの要因に相当する下位項目について平均とSDを求めたところ、「完成度」下位尺度得点(平均28.90 SD=4.15)、「創造性」下位尺度得点(平均29.95 SD=3.37)、「負担感」下位尺度得点(平均9.92 SD=2.64)、「抵抗感」下位尺度得点(平均7.16 SD=2.10)、「楽しさ」下位尺度得点(平均8.44 SD=1.84)であった。内的整合性を検討するために各尺度の α 係数を算出したところ、「完成度」 $\alpha=.78$ 「創造性」 $\alpha=.63$ 「負担感」 $\alpha=.62$ 「抵抗感」 $\alpha=.60$ 「楽しさ」 $\alpha=.31$ であった。「楽しさ」の項目間の値は正の相関を示していたが α 係数については予想よりもはるかに低い値であった。それ以外の項目については信頼できる尺度と考えられる。それぞれの下位尺度間の相関をTable 3に示した。

(3) 表現者・保育者としての意識

アンケート項目を因子分析の過程で、分析からはずした項目が20項目あった(Table 4)。アンケート

表現遊びの作品作成過程における学びの要因

の内容の妥当性を計る上で、誰もが高得点を示したため天井効果が見られた項目である。異なる視点から考えると保育者を目指す大学生が身体表現の課題を通じて共通の意識という解釈もできる。

項目の内容を整理すると、「笑顔など顔の表情のよさ」がもっとも項目得点の平均値が高く、「恥ずかしくないこと」など表現者としての姿勢、「動きをはっきり示すこと」「なりきること」、など発表のために自分のあり方を問う内容であった。

「協力者がいることがうれしい」など、グループの仲間との存在、課題遂行上必要な「協同性」についての意識の高さが伺えた。

「身体で表現することは子どもにとって重要なことだ」(平均=5.60 SD=0.60)「身体で表現することは子どもにとっても重要だと感じるの、自分の役割としてしっかり表現できるようになりたい」(平均=5.58 SD=0.67)の項目得点が高かった。子どもにとって身体表現の活動が重要であるがゆえに、保育者の役割を認識しようとしている様子が伺えた。

Table 2. 表現遊びの作品作成過程の学びの要因についての因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV	V
H18 動きをしっかり覚えること	.99	-.20	-.04	.02	-.04
H19 リズムに合わせることができること	.82	-.08	.15	.05	-.11
H25 できていない人には、教えてあげたくなる	.54	.08	-.01	-.15	.17
H17 音楽を見つけるセンス	.45	.22	-.09	.26	.03
H10 動きでうまく表現すること	.38	.14	.03	-.04	-.03
H23 自分の思うことをどンドン伝えること	.35	.15	-.08	.01	.15
H2 作りたい作品の構成を考えること	.01	.76	.07	-.07	-.05
H7 音楽をききながら動きを思いついていくこと	.08	.60	-.01	-.04	-.08
H1 ストーリーを考えること	-.02	.60	-.04	.07	.07
H22 意見をまとめること	.00	.55	-.21	.20	-.05
H6 動きのイメージと音楽の結びつきを感じる	.30	.47	.02	-.16	-.03
H3 動きにするために、関連する言葉や事柄をイメージすること	-.19	.40	.13	.10	-.17
H8 音楽の歌詞を取り入れた動きにすること	.04	.35	.13	.12	.20
H27 自分に負担がかかりすぎているのでいやだ	-.08	-.11	.96	.00	-.01
H28 時間が限られているのに、うまく時間を使えない人があるのはいやだ	.07	.00	.49	.01	.10
H5 ダンスの専門的技術	.24	.19	.38	.14	-.08
H29 発表することは緊張するので、できたらしたくない	-.07	.09	.12	.79	.16
H34 身体で表現することは難しい	.07	.05	-.03	.55	-.12
H37 身体で表現することが自分にとって苦手なのは、今まで楽しいと感じたことがあまりないからだ	-.01	-.23	-.01	.22	.59
H39 身体で表現する楽しさは「動く」からである	.01	.14	.09	-.32	.57
因子相関行列	I	II	III	IV	V
I	-	.60	-.01	-.05	.18
II		-	.05	-.02	.26
III			-	.36	.07
IV				-	.14
V					-

Table 3. 表現遊びの作品作成過程の学びの要因についての下位項目の相関

	完成度	創造性	負担感	抵抗感	楽しさ	平均	SD	α
完成度	-	.54**	.11	.08	.10	28.90	4.15	.78
創造性		-	.11	.07	.01	29.95	3.37	.63
負担感			-	.33**	.10	9.92	2.64	.62
抵抗感				-	.13	7.16	2.10	.60
楽しさ					-	8.44	1.84	.31

** $p < .01$

Table 4. 天井効果で削除した項目

	度数	最小値	最大値	平均	SD	平均 - SD	平均 + SD
16 笑顔など顔の表情	100	2	6	5.67	0.77	4.90	6.44
26 協力しようとしてくれる人がいるとうれしい	100	4	6	5.67	0.59	5.08	6.26
36 身体で表現することは子どもにとって重要なことだ	100	4	6	5.6	0.60	5.00	6.20
32 身体で表現することは子どもにとって重要だと感じる ので、自分の役割としてしっかり表現できるよう になりたい	100	3	6	5.58	0.67	4.91	6.25
35 身体で表現することは友達や仲間がいることで楽し くなる	100	2	6	5.55	0.73	4.82	6.28
40 身体で表現する楽しさは仲間と一緒に「動く」からで ある	100	1	6	5.55	0.81	4.74	6.36
31 自分で考えたことを作品に仕上げる過程は困難だ が、将来に役だつと思う	100	2	6	5.54	0.80	4.74	6.34
15 動きをはっきり分かりやすく表現すること	100	2	6	5.51	0.80	4.71	6.31
21 自分で表現するだけでなく、周りの人と一緒に表現 すること	100	3	6	5.5	0.69	4.81	6.19
20 表現したものになりきること	100	3	6	5.47	0.80	4.67	6.27
33 身体で表現することは楽しい	100	3	6	5.45	0.81	4.64	6.26
30 発表したり、人の前で演じることは将来の自分 にとって必要なことなので価値のあることをやってい る気がする	100	1	6	5.43	0.95	4.48	6.38
38 身体で表現すると「楽しい」という気持ちが生まれる	100	3	6	5.39	0.79	4.60	6.18
4 動きをつくりだしていくこと	100	3	6	5.38	0.80	4.58	6.18
11 グループの人の意見を生かすこと	100	2	6	5.38	0.86	4.52	6.24
14 人前で恥ずかしがらないこと	100	2	6	5.34	0.91	4.43	6.25
9 表現したいイメージを動きにすること	100	1	6	5.33	0.92	4.41	6.25
24 自分の意見を言いながらも、人の意見と折り合いを つけること	100	2	6	5.3	0.87	4.43	6.17
12 グループをまとめること	100	1	6	5.14	0.95	4.19	6.09
13 時間的な計画性を持つこと	100	1	6	5.13	0.95	4.18	6.08

6. 全体的考察

(1) 表現遊びの作品作成の学びの要因について

表現遊びの作品作成課題で学生はどのような内容を学んでいるのかを、アンケートに基づいて分析したところ、「完成度」「創造性」「負担感」「抵抗感」そして、「楽しさ」の5つの因子が得られた。それぞれの因子の示す意味と、学びの内容との関係から考察する。

第1要因「完成度」は、表現遊びの作品作成課題に対して、保育者を目指す大学生が、リズムに合わせて、動きの質の高いよりよい作品に仕上げようと積極的な姿勢を持っていることを示すものであった。第1要因「完成度」は、第2要因「創造性」の要因との間に相関が見られたが、作品を完成させるために考え、動きで表現することを積み重ねていく努力を示す「正の循環構造」が推測された。

それに対して、第3要因の「負担感」と第4要因の「抵抗感」の要因は、作品作りに対する負の感覚である。目に見える形にならないとき、グループの中での役割のバランス感覚が崩れ、負担と感じるようになる。また発表に対する緊張や、なれない身体の動きを考え出す難しさなど、できたらしたくないと感じる。第3要因の「負担感」と第4要因の「抵抗感」の要因が相関を示したとは、表現遊びの作品に取り組み際の「負の循環構造」が働いているといえる。

(2) 思考と身体

佐藤(1995)は「表現は表出と同時にその構成でもある」と述べているが、表現遊びの作品をまとめようとする過程には、言葉をイメージし動きに変換し、集団での動きの組み合わせなどを考える思考的活動と、身体を動かして動きを見つけていく身体的活動を伴う。思いついたことや感じたことを構成していくことは、時間のかかる忍耐を要する課題でもある。制限ある時間のなかで、見えないものを形あるものに仕上げる過程では、苛立ちや不安、負担を感じる。しかし、自分の感じ取ったことを、身体を通して動きとして仕上がり具体的に目標に近づいていくと、思考的活動と身体的活動がより活性化する。

先の見えない不確定要素が解消されると「楽しさ」に結びつくことはレポートの自由記述のなかで見られた。「はじめは座って考えているとなかなかアイデアが浮かばない。立ち上がって動き始めると、どんどんアイデアが出て楽しくなってきた。」という記述が示すように、負の循環から正の循環へ好転するとき、不安定要素が解消される。このことが「楽しさ」にむすびつくのであろう。しかし中島(2003)がいうように、「ダンスにおいて、一旦身体がいやだと拒否してしまったらこれはもう「絶望(アウト)」である」という瞬間の変化がある。身体による表現を積み重ねる過程には、身体と心の作用が敏感に影響しあうことが読み取れた。

(3) 身体の共振

不安定要素である負の感覚を支え好転させる原動力となるのは、グループで取り組む仲間の存在である。お互いの動きの発見が相互に刺激しあいながら、作品作りに格闘している様子が「友達の気づいた動きをヒントにしながら動きを作っていくとまたさらに楽しくなってくる」という自由記述に現れている。構成がうまくいかず行き詰ったときに、グループのメンバーの動きをきっかけにして動きを生み出すというのは、仲間同士の響きあう身体つまり、「共振」の作用によるものである。一人ではできないことでも仲間同士で引き上げられていく瞬間である。「一人ではない、みんなでよかった。このグループで作品づくりができてよかった」という仲間の存在に対する感謝の記述もある。作品を完成させるといふ目標に到達できると、「できたことへの実感」にむすびついていく。

(4) 身体の記憶の活性化

大学生を対象にした表現遊びの作品作成課題は、限られた時間のなかで思考的活動と身体的活動を活性化し、形あるものに作り上げることであった。松岡(1995)は、芸の習得過程で重要なこととして、「教えない」教育が学習者の内部での対話活動を活性化させ、学習者が様々な暗中模索を行うなかで深いレベルの芸の習得が可能となり、ひいては個性の開花につながる」と述べているが、演習課題においても、学生個人の内省や、仲間同士の対話が不可欠であった。絶えず葛藤の中で作り上げる身体の動きの作品である。集団で身体の表現を積み上げていく体験について、中島(2003)は「想像力や空想力を駆使した体験は、身体の記憶としてしっかりとした痕跡を残し、さらに人間形成に大きな役割をはたす」というが、学生にとっても身体の記憶として残すことと、新たな自分の発見や他者との関係形成などの学びの機会となっていたと感じている。

幼児の身体表現の指導を考える際にも、成功体験の中で学ぶことができる環境を準備し、身体の記憶となるような身体の表現の体験を考える必要がある。

演習課題は幼児の身体表現の特性や指導方法を考えるきっかけとなっていたが、演習課題の進め方について授業時間の配分や、集団での思考を高めるための適正な人数などについては今後の課題としたい。

文 献

- 大畑 祥子 1991 保育内容 音楽表現 建帛社
 名須川知子 2005 保育内容の構築に関する研究－創造的表現活動を中心に 日本保育学会 第58回大会発表論文集, 70-71.
 古市 久子 2007 身体表現の発達に関する研究の現状と課題 児童心理学の進歩
 遠藤 晶・花木沙織 2008 運動会における表現遊びの実践－身体表現あそび『あした 天気にな～れ』の構成内

(遠藤)

容の検討「武庫川女子大紀要(人文・社会科学)」55, 31-39.

森 司郎 1999 幼児の「からだ」の共振に関して -対人関係的自己観点から. 保育学研究, 37 (2), 24-30.

傳田 光洋 2007 皮膚から考える命, ころ, 世界 第三の脳 朝日出版社

中島 夏 2003 子どもの身体とダンス 『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』 佐藤学・今井康雄編 東京大学出版

遠藤 晶 2007 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について -身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して 武庫川女子大紀要(人文・社会科学) 54, 91-99.

松岡 心平 1995 芸の伝承 佐伯 胖・藤田英典・佐藤 学(編)表現者として育つ 東京大学出版会

名須川知子 2004 共に響く歌・音・動き-乳幼児の表現発達の道筋から(企画シンポジウム)日本保育学会 第57回大会発表論文集, 96-97.